# DEVELOPMENT OF SPLIT COAXIAL RFQ FOR URANIUM ION ACCELERATION.

S.Arai, T.Fujino, T.Fukushima, T.Hattori<sup>\*</sup>, E.Tojyo and N.Tokuda.

Institute for Nuclear Study, University of Tokyo, Midori-cho, Tanashi, Tokyo 188, Japan \* Tokyo Institute of Tecchnology, Ohokayama, Meguro-ku, Tokyo 152, Japan

#### Abstract

A split coaxial RFQ with modulated vanes has been developed for accelerating the uranium ions of a few keV  $\checkmark$ u. Mechanical and rf characteristics have been examined by means of a  $\frac{1}{4}$  scaled model with flat vanes. based on the cold test, the  $\frac{1}{4}$  scaled model is improved and the flat vanes are replaced with modulated vanes for proton acceleration test.

#### §1. はじめに

加速周期構造が短くて、ビームの収束が電場により行われることから、大強度、低速度 の粒子ビーム加速に適しているRFQライナックは、今や大規模なコッククロフト・ワル トン静電加速器に取って換わりつつある。 陽子加速に於いては、加速周波数は 200~ 400 MHz となり four vane 型RFQが定着しているが、特にウラニウムのような非常に 重いイオンの大強度ビームを加速する為には、現在のイオン源の能力からして、低電荷イ オンを加速しなければならず、加速周波数は 10 ~ 15 MHz ぐらいまで低くなり、加速空 胴の大きさや加速電場の安定性の面で、合理的な共振構造が必要とされる。

このような共振構造として、分割同軸型共振器がGSIで R.W. Mueller によって発明 され、大強度重イオン・ビームによる慣性核融合の基礎研究の為に、分割同軸型RFQラ イナックの実用機の建設が既に進められている。 INSでは、重イオンシンクロトロン の入射器の一部として、分割同軸型共振器に加速電極として four vane を装着したウラ ニウムRFQの開発が進められて来た。 開発の第一段階として、4つの module 空胴か らなる modulation を付けない flat vane を取りつけた¼スケールモデルが作られ、今 までに、機械特性, 髙周波特性が調べられた。 ここでは今までに明らかにされた髙周波 特性について説明し、次に開発の第二段階として、 ¼スケールモデルの flat vane を modulated vane に取り換え、陽子加速テストを行う計画の準備状況を説明する。

## § 2. 高周波特性

<sup>1</sup>4スケール model は、同軸伝送線のインダクタンスによって、タンクのインダクタン スを近似して設計したのであるが、高周波特性の実験研究の結果、内導体の断面形状と, 内導体を支える stem の、インダクタンスに対する効果によって、設計周波数が下がる事 が分った。 Stem の共振周波数、電場分布に対する効果を調べる為に、4つの module の境いにある stem に端板を取り付けて、stem だけによって電極が支えられた場合と、 端板によって電極が支えられた場合の差が測定された。 基本 mode と髙調波 mode の共 振周波数がそれぞれの場合に対して表1に示されている。 4つの module 空胴構造の場 合の、stem の基本 mode の共振周波数に対する効果が図1に示されている。 無負荷の Q値は、stem だけの場合の方が20%小さくなる。 軸にそった電場分布の平坦度は、 図2に示すように、どちらの場合でも±2.5 %以内で、stem だけの場合でも module 同 しが強く結合しているので、問題ないことが分る。 インダクスタンス,共振周波数,Q 値の実験値と計算値が表2で比較されている。 この計算では、内導体の形状と stem の インダクタンスへの効果が考慮されている。 次に内導体の断面形状とインダクタンスと の関係を調べる為に、長さ28cm,直径13.4cm の小さいアルミニューム製の空胴を使って 表3に示すような4種類の電極に対して、静電容量,インダクタンス,共振周波数の測定 を行った。 この結果、内導体の断面が円形で分割すきまが、小さい特別な電極を除いて 同軸伝送線のインダクタンスでは近似出来ない事が分った。

## §3. 陽子加速テスト・ライナック

Flat vane を取り付けた4スケールモデル による種々の特性試験に基づいて、この加 速器の総合的性能を評価する目的で陽子加速テストが計画された。 陽子加速の為に、4スケールモデルの flat vane が modulated vane に置き換えられる、同時に、内導体 の幾何学的な寸法も新しい計算方法で周波数が 50 MHz になるように設計され、作り直さ れる。 ビーム運動学的な問題に関しては、分割同軸型RFQの場合、となり合う vane 電圧を0, Vとした時、ビーム軸上に V/2 の電位が生ずるという事がある。 それ故、 ビームの入射,出射時に V/2 の加減速を受ける為、radial matching section でこれを 考慮しなければならない。 Vane パラメーターは表4に示されている。 Vane は核研 にあるNC旋盤を利用して、20 c m長まで加工出来るように工夫された。 これらの短 いvane を継ぎ全長200 c mの vane 電極が製作される予定である。 試し加工中の写 真が図3に示されている。

テストベンチは図4に示されているが、出来るだけ簡単になるように設計されている。 入射ビームは、pulse 動作の 2.86 GHz のECRイオン源で作られ、イオン分析磁石を通 って、二組のアインツェルレンズでRFQに整合される。 出射側には、分解能 0.8% のエネルギー分析系と、ビームモニターがあり、出力ビームの直径が4mmで分散角が 2 6.5mrad と比較的小さいことから、収束系を加える必要もなく、コンパクトに設計されて いる。RFQのRF電源としては、5Fの球を使って200Wの電源が製作されている。

### 参考文献

- 1. S. Arai, GSI-Report 83-11, 1983.
- S. Arai et al., IEEE Trans. Nucl. Sci., Vol. NS-32, No. 5, October 1985, p. 3175.
- 3. R. W. Mueller et al., Proc. 1984 Linear Acc. Conf., Seeheim, Fed. Rep. of Germany, p. 77.
- 4. T. Fujino et al., INS-NUMA-59, 1985.
- 5. E. Tojyo et al., Contibuted Paper to 1986 Linear Acc. Conf., SLAC.

Table 1. Resonant frequencies of structure with and without end-plates.

No. of harmonics	Without end-plates	With end-plates
0	37.120 MHz	41.762 MHz
1	75.089	76.269
2	132.994	132.879
3	185.362	187.968



<sup>(</sup> Number of module ends closed by semicircular plates )

Fig. 1. Relation between the resonant frequency and the number of end-plates installed in the four-module cavity structure.

Table 3. Comparison between calculations and experiments on a small split coaxial cavity with various electrode shapes.

Shapes of Electrodes	Measured Static Capacitance C (pF)	Inductance (nH)		Resonant Frequency ( Milz)			
		L,	Ĺ,	L,	Areasured foe	Calculated foc	fom foc
	84.0 spaced with acryl plates	63.38	61:1		68.97	70.25	0.98
	82.4	64.38	55.2	69.1	69.10	74.62 66.72	0.93 1.04
H	89.2	50.75	45.1	51.8	74.79	81.10 74.00	0.92 1.01
	99.5	51.31	48.6		70.43	72.71	0.97

L, = 
$$\frac{1}{(2\pi f_{0m})^{2}C}$$
 : Calulated from measured value.  
L, =  $\frac{\mu_{0}1}{2\pi} \ln \frac{r_{b}}{r_{a}}$  : Calculated by coaxial line approximation.

ι.

- : Calulated from measured value.





Fig. 3 Vane Machining

Table 2. Comparison between calculations and experiments on a 1/4 scaled model.

	Without end-plates		With end-plates		
	Calculation	Heasurement	Calculation	Measurement	Unic
Inductance	48.4	49.8	159.5	157.1	nH
Resonant frequency	37.7	37.1	41.5	41.8	MHZ
Resonant resistance	120	80	135		kΩ module
Unloaded Q	2650	2000	3250	2320	



Fig. 2. Longitudinal field distributions of the fundamental and higher harmonics modes; left and right show the cases without and with end-plates.

Table 4. Design parameters of a model of uranium RFQ.

	Design	
Charge to mass ratio	0.06667	
Frequency (f)	50	MHz
Kinetic energy (T)	2.00 - 59.6	keV/u
Normalized emittance $(\epsilon_N)$	0.03	π cm·mrad
Kilpatrick factor	1.23	
Intervane voltage (V)	43.5	kV
Focusing strength (B)	3.8	
Max. defocusing strength ( $\Delta_b$ )	-0.075	
Synchronous phase ( $\phi_s$ )	-9030	deg
Max. modulation $(m_{max})$	2.48	
Number of cells	168	
Vane length	205.19	СП
Mean bore radius (r <sub>e</sub> )	0.541	Cm
Min. bore radius (a <sub>sin</sub> )	0.294	Cm
Margin of bore radius (a, in /abea	.) 1.15	
Transmission (O emA)	84	2
(2 emA)	69	*
(4 emA)	56	*



Layout of Teststand Fig. 4

-34 -